
魔法生物研究会！

山川四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法生物研究会！

【Nコード】

N2900W

【作者名】

山川四季

【あらすじ】

念願の、歴史ある「コセキ総合大学」への留学を果たしたセイシヨウ。彼は学費も生活費も自分で稼がねばならない苦学生だった。勉強とバイト以外には脇目もふらない予定……だったのだが、彼を取り巻く学友たちがそれを許さなかった！

入学当日・1

学術国家オート。そこは純粹に學問を究めたいと願う者にとって、正に聖地とも言つべき場所。

野心と熱意を抱いた探究者たちは、更なる深みを目指してこの国へと集まつてくる。

オートが統括する研究機関に留学する際、求められる条件は2つだけ。

1、宗教・思想の自由は認められるが、司法制度はオート固有のものに従ふこと。

2、出身国の階級制度による身分差別、および経済格差による差別意識を持つ者は入国を禁ず。

留学生らは入国管理局で、この誓約書にサインした時点で晴れてオートの市民権を得るのである。

季節は水。全ての始まりを意味するこの季節に、各研究機関の入学式が行われる。

オート南方の都市アイヒに存在する、歴史ある学術研究所「コセキ総合大学」でも、期待に顔を輝かせた新入生たちが無事に入学式を終えたところだった。

大学内での生活は基本的に生徒たちの自主性に任されている。大学側からの講義を受けるか強要されることもないし、どの研究室であつても出入り自由だ。

新入生のある者は入学式を終えてすぐ、興味のある分野の講義に顔を出した。またある者は翌日から気合を入れて學問に取り組むために、早めに下宿に戻つて休むことにした。

そして今。大学内の静まり返った廊下に佇んで、途方に暮れている新入生がいた。

「……どこだここは」

明るい茶色の髪をした少年は、やや童顔のその顔に困惑の表情を浮かべて呟いた。

彼は名をセイショウという。他国からの留学生だ。

コセキ総合大学の建物は、長い歴史を経て非常に味わい深い趣をたたえている。セイショウが今いる廊下も高い高いガラス張りの天井に魔法がかけられており、上空から降り注ぐ日光が七色に揺らめいていた。

大学内の探検をしていたセイショウは、その神秘的な光景に口をポカンと開けたまま上を見上げて歩き続け……気づけば人の気配が全くない場所へと入り込んでしまったのだ。

彼は今、大学の案内所で地図をもらってこなかったことを激しく後悔していた。

殺風景な壁には出入り口も窓もなく、今居る場所のヒントになりそうなものは見当たらない。

通りすがりの人間を捕まえようにも、仔ブタ一匹通らない。

「……とりあえず座ろう」

こみ上げてくる不安感から現実逃避するため、セイショウは壁にもたれかかるとズルズルと床に座り込んだ。

ふーっと勢いの良い溜息をつく。しばらく休んで気力を回復したら、何か良い案が浮かぶかもしれない。少なくとも、また歩き出すための体力は回復できる。

両ひざを立て、その上に手を乗せたセイショウは、自分のつま先で七色の光が水面みなものように揺らめいているのを、見るとはなしにポーツと眺めていた。

不意にその光が消え、周囲が暗闇に包まれる。

（なんだ？）

首を捻じ曲げて上空を見上げたセイショウは、驚きに目を見開いた。

何かフワフワとした白い毛に覆われた2匹の巨大な生物が、ゆったりと天井近くを飛んでいる。

セイショウは慌ててその影から抜け出ると、改めて彼らの全身を目にして「うわぁ……」と声を上げた。

縦に並んだ2匹の謎の生き物は、滑るように空中を横切って行く。風にたなびく長い毛は、日の光を浴びて銀色に輝いていた。

その雄大さと美しさだけでも十分に感動的だったが、セイショウが目を瞠ったのは、また別のものが持つ美しさだった。

後方を飛んでいる生き物は、背中に人を乗せていた。高度が高いのでハッキリとは分らないが、どうやら女性であるらしい。

その人物は長い長いストロベリーブロンドの髪を束ねもせず、風になびかせるがままにしていた。

光輝く銀色と赤毛のコントラストに、思わず感嘆の声を上げてしまったのだ。

その場に立ち尽くしたまま、じっと彼らの様子を見つめるセイショウ。

すると彼の視線に気づいたのか、謎の生き物の背中に乗っていた女性が下を見下ろし、自分を見上げている少年の存在に気がついた。彼女の顔に「しまった」という表情が浮かぶ。

地上に居るセイショウからは顔の動きを確認することは出来なかったが、それでも女性のまとう雰囲気が変わったことは分かった。

彼女が何やら合図をすると、2匹の生物は動きを止め、空中に静止した。

「……」

女性の視線が自分に注がれているのを感じ、身動きせずにじっと見つめ返すセイショウ。

だがそのまま3分も経つと、さすがに居心地が悪くなってくる。何か声をかけた方がいいのだろうか、とセイショウが迷い始めた頃だった。

彼と同じように身じろぎもしなかった女性が、急に身を屈めて自分の乗っていた生き物の身体を撫でた。

それに応えるように謎の生物がゆっくりと動き始め――。

「うえええええっ?!」

一直線にセイショウに向かって急降下してきた！
何が起こっているか分からないものの、このままでは確実に衝突する。

セイショウは悲鳴を上げると、身を翻して走り出した。

だが生き物は空中を泳ぐスピードをアップさせて、ぐんぐんと彼との距離を縮めて行く。

必死に走りながら肩越しに振り返ったセイショウは、自分のすぐ後ろで大きく広げられた生き物の口の中に鋭い牙が並んでいるのを見て、真っ青になった。

今まで以上に身体を前傾させると、限界まで足の回転数を上げ、迫りくる恐怖から逃れようとする。

だがその努力も空しく。

「うわっ、うわっ、わああああああっ！」

ばかりと啞えられたセイショウは、そのまま上空へと連れ去られた。

目が回りそうなほどの急激な高度の変化と、全身に感じる風圧。

そして肉食獣並みの牙を持つ生物に啜えられているという恐怖。
彼が気を失うまで、長い時間はかからなかった。

入学当日・2

（ああ、夢だったんだ……）

浮上してきた意識の底で、セイショウはぼんやりと思った。

突然、怪物に襲われて連れ去られる夢を見るなんて、まったくどうかしている。突拍子もない夢を見るのは、別に珍しいことではないけれど。

目を閉じたまま苦笑して、寝返りを打つ。フカフカとした心地よい寝具が、セイショウの体重を受け止めて柔らかく沈んだ。

「……？」

その感触に違和感を覚え、セイショウは手で寝具を撫でまわした。手触りが滑らかで、温かく弾力がある。おかしい。こんな上質な寝具のある下宿に滞在できるほど、自分に財力は無い。おまけに、何だか上下しているような……？

このまま安眠に身を委ねていたいという欲求を抑え込み、目を開けたセイショウは、声にならない悲鳴を上げた。

自分を連れ去った怪物の顔が、どアップで視界に飛び込んできたのだ。瞬間的に身体中の毛穴から冷や汗が吹き出し、もちろん眠気など跡形もなく吹き飛んでいた。

じっと見つめてくる黒い巨大な瞳から目をそらすこともできないまま、セイショウは自分の置かれている状況を理解した。なんと彼は、この巨大な生物の腹を枕にして眠っていたのだ。そして怪物は、首を巡らせてセイショウを見つめながら、穏やかに呼吸をしていた。

（一体なぜこんなことに?!）

滝のような汗をだらだらと流しながら、緊張で身を固くするセイショウ。

すると怪物は、目を細めて「くるるる……」と小さな音で喉を鳴らした。

「ああ、気がついたのか？」

声とともに、ひんやりする手がセイショウの頬に当てられた。かがみこんで彼の様子を伺っているのは、あのストロベリーブロンドの髪の女性だ。

彼女の長い髪が垂れ下がり、怪物からの視線を遮ってくれたことに、思わず安堵のため息をつくセイショウ。女性は掌を彼の額に移動させて、表情を曇らせた。

「寝汗をかいているな……無理もない。今日は暑いからな」
(ちがぁーう！)

断じて違う。寝汗じゃない、冷や汗だ。と言つかこの状況を説明してくれ！

心の中で色々と突っ込みを入れるセイショウだが、心配そうなペールブルーの瞳に見下ろされると、口に出すことは出来なかった。

「今日はそんなに暑くないぜ？」

背後から聞こえた男の声に、女性はセイショウの側にかがみこんだまま声の主を振り返った。

セイショウも目だけ動かしてそちらを見る。がっしりとした身体つきの男が、長い脚を組んで椅子に座っていた。口調も表情も、どこか皮肉っぽい雰囲気なたたえた男だ。

「そうか？」

「ああ。だがそのまま、もふもふの腹の上に居たら暑くなるだろうけどな」

「それはそうだ」

女性は男の言葉に頷くと、セイショウに手を差し出した。

（もふもふ？）

疑問に思いながらも、その手を借りて身体を起こすセイショウ。向かい合って立ってみると、女性はセイショウよりも背が高く、見下ろされる形になった。

「ありがとうございます。あの……」

何がどうなっているのか知りたい。けれど、どうやって話を切り出せば良いのだろうか。

（この怪物に僕を襲わせませんでしたか？ ……まさかね）

セイショウが悩んでいると、女性は彼の手を握ったままニッコリと笑った。

「私はベル・クインだ。よろしく」

「あ、はあ。よろしく」

「俺はソル。狩猟担当だ。よろしくな、セイショウ」

「え。なんで僕の名前……」

なにやら不可解な単語があったような気がするが、それよりも、この男が自分の名前を知っていることの方が気になる。

「ああ。ちょっと借りたぜ。入部届に名前を書くためにな」

ぽーんとソルが投げてよこしたものは、今日もらったばかりの学生証だった。慌ててそれをキャッチするセイショウ。

「入部届？」

ソルは椅子から立ち上がると、怪訝な顔のセイショウの目の前で、持っていた羊皮紙を広げて見せた。セイショウは一番上に書かれた大きな文字を、声に出して読む。

「魔法生物研究会……」

「そう。今日からお前は新入部員だ」

「はあ？」

要領の得ない顔で、セイショウがソルを見上げる。

「僕、入部するなんて一言も言ってませんけど」

「仕方ねーんだよ。もふもふがお前のこと気にいつちまったから」

がりがりと頭をかきながら、面倒くさそうにソルが言った。その傍らに立つベルが、真面目な顔で頷きながら口を開く。

「正確に言つと、もふりーなの方だ」

「あの、何ですか？ もふもふ……もふりーな？」

セイショウがそう言つと、返事をするかのように、甲高い「きゅるるっ」という声が聞こえた。振り向くと先ほどの獣が、仰向けになって床に身体をこすりつけている。

「見る。もふりーなもあんなに喜んでいる」

「俺には見分けがつかねーんだよ」

嬉しそくに指をさすベルに、ソルが呆れたような顔を向けて言った。

察する所、あれが「もふりーな」という生き物らしい。この2人の会話から、どうやら自分がこの獣に気に入られたらしいことが分かるが、だからと言ってなぜ入部につながるのだろう。

「ああ、悪い悪い」

何か言いたそうなセイショウの顔に気づいたソルが、軽い口調で謝りながら向き直った。

「あー……要するにだな、ここに居るベルが」クイッと親指でベルを指す。「もふもふ達に乗ってる所を見られるのは、非常にマズイことなんだ。で、秘密を守ってもらうために、この部に入ってもらおうっーわけ」

ベルも頷きながら説明に加わる。

「最初ももふもふに頼んで、君の記憶を消そうとしたのだ。しかし、もふりーが反対してな。いきなり君の捕獲に走ったのだ。……私の命令をもふりーが聞かないなんて、初めてのことだった。君はよほど気に入られたらしいな」

口調は穏やかだが、ショックを受けたことを隠しきれていない。微笑みを浮かべてはいるが、「記憶を消そうとした」の辺りで、目が不穏に光ったのを見逃さなかったセイショウは、思わず逃げ腰になった。

「しっかし恐怖のあまり失禁しなくて良かったぜ。野郎のズボンなんて脱がしたくないからな」

にやりと口の端を歪めて、からかうようにソルが言った。むつとするセイショウだったが、話をはぐらかれそうになっていることに気づいて、慌てて自分を落ち着かせる。

「それだつたら別に入部しなくても……僕、誰にも言いませんよ」
「『憂いの種を1つでも残しておけば、いつの間にか成長した蔓に絞め殺される』。兵法の基本だな」

あごの無精ひげを撫でながら、ソルが古典を引用した。その意外な知性にセイショウは驚きの声を上げる。

「あんた……ひょっとして学生だったのかっ?！」

「何だそれは。俺を何だと思ってた。っーかお前、いきなりキャラが変わったな! それが本性か!」

「ただのチンピラか、金で雇われた傭兵だと思ってたよ!」

「てめえ、魔法戦士様を捕まえて失敬な!」

「魔法戦士い?!」

セイショウの声が裏返った。

魔法戦士と言えば知性と教養、そして魔力を兼ね備えた存在だ。肉弾戦で戦うことはなく、知力と魔法で戦況を覆す頭脳派戦士。つまりインテリジェンス中のインテリジェンス。

しかし目の前の男は、がちがちの「肉体労働!」な身体つき。粗野で乱暴な口調といい、どう見ても胡散臭い外見といい、傭兵にしか見えない。

セイショウの中で魔法戦士に対するイメージがガラガラと音を立

てて崩れ落ちた。

がつくりと肩を落としたセイショウの背中を、まあまあとベルが慰めるように撫でる。

「そう気を落とすな。信じられないだろうが、確かにソルは魔法戦士だ。それも優秀な。……信じられないだろうが」

「おいこら。何で2回繰り返した」

ソルの睨みつける視線を無視して、ベルは話を続ける。

「私たちは君を信用していないわけじゃないんだが……もふもふが、どうしても君を目の届くところに置いておきたいというのだ」

「もふもふが……？」

顔を上げたセイショウに、ベルが頷いた。

ちらりと視線を背後にやると、白い毛の獣はすやすやと気持ち良さそうに眠っている。

「あれはもふりーなだ。実は、もふりーながあまりにも君を気に入ったものだから……その……もふもふが嫉妬してな。もふりーなはもふりーなで君を手放したくないと言うし、もふもふは君を監視したいと言うし……」

言いにくそうに続けられた言葉に、セイショウは頭を抱えて脱力した。

獣に気に入られて、更に嫉妬までされる僕って一体……。

（監視なんかしなくなつて、獣相手に何をするって言うんだ！）

「まあ、そんな経緯^{いきはつ}なんだが。私たちとしては仲間が増えるのは大歓迎だ。君が入部してくれたら嬉しいよ」

にこり、と微笑むベル。だがセイショウは、その笑顔に騙されはしなかった。

「……そもそも貴女があんな迂闊に飛び回ってたせいじゃないですか」

びし、とベルの笑顔が凍りつく。

「その通りだ。普段から気をつけるように言ってるんだがな。こいつ、移動が面倒くさいとか言ってる聞きやしねえんだ」

ソルがベルの頭を、拳でこづいた。

「し……しかし！ 今まではちゃんと目撃者の記憶を消していたのだから、問題ないだろう」

「……で？ 今回、例外が発生して面倒くさい事態になったわけだ」「うっ……」

顎を上げたソルに見下ろされ、言葉につまるベル。

彼女を初めて見た時は人間離れた神々しさまで感じたものだが、こうして地上で改めて見ると、意外と子供っぽい人だなとセイショウは思った。

ソルは明らかにベルをいじめて遊んでいる。2人の間に漂う雰囲気から察するに、こんなやり取りは日常茶飯事なんだろう。

「言っときますけど、僕、クラブ活動なんかしている暇ないですよ。学費も生活費も稼がなきゃいけないんですから」

このままでは自分の存在を忘れ去られそうだと思ったセイショウ

が、慚然とした表情でソルに言った。

1年分の学費を貯めて留学してきたが、生活費は自分で稼がなければならぬ。もし1年後に、まだ勉強を続けたいという気になった時のために、そこから先の学費も備えておかねばならぬだろう。叔母を頼ればポンと全ての費用を出してくれるだろうが、それだけはしたくなかった。

コセキへの留学が認められた時から、勉強とバイト以外はしない覚悟だ。たとえ謎の生物に好かれたからと言って、それは変わらない。

「そんなわけで入部はお断りします」

「金になるぞ、うちの部は」

ペこりと頭を下げ、さっさと戸口に向かって歩き出したセイシヨウは、ぼそりとソルが呟いた一言を聞いて動きを止めた。

「そんじょそこのバイトじゃ稼げないぐらいの金が入るんだがなあ。しかも、どんな仕事よりも効率的に稼げるぞ。学費も生活費もすぐ貯まる」

首だけ巡らせて、ソルを凝視するセイシヨウ。ソルは何気なさを装って彼に近づくと、1冊のノートを広げた。

「ちなみにこれが、去年のこの部の収益だ」

「……！」

そこに書かれた金額に、目を瞠るセイシヨウ。この部に何人の部員が居るか知らないけれど、全員で分けたとしても、かなりの金額になることは間違いなかった。

「で、どうする？ お前の入部届はまだここにある」

「……性格悪いですね」

フフンと笑うソルを上目使いで睨みつけた後、セイショウは苦々しげな顔で視線を逸らせてため息をついた。

「……分かりました。入部しますよ」

入学当日・3

「え、入るのか？」

間の抜けた声を上げたのはベルだった。

「さつき歓迎するとか言ってませんでしたか？」

「ああ、まあ、そうなんだが……」

呆れたようにセイショウが言うと、ベルは言葉を濁して視線を彷徨わせた。明らかにセイショウの返事は予想外だった様子だ。

「その……活動内容も知らないのに簡単に決めたから、驚いてな」

「金のためなら大抵の困難は乗り越えられる、がモットーですから」
「良い性格してるな」

ソルが収支報告ノートで顔をパタパタと扇ぎながら笑った。

「じゃあ、お前が会計担当な。今までは俺が兼任してたんだけどよ。助かるわー。俺、こういう細かい作業が苦手なんだよな」

「でしようね」

「あ？」

「何でもないです。……で、どういう活動なんですか？」

セイショウは手元に目を落として、ソルの視線をスルーした。

ページを繰りながらザツと内容を確認する。やはり、かなりの額の収益が発生している。支出の額もそれなりに大きかったが、赤字は発生していない。この分なら、確かに普通のバイトでは得られないほどの儲けが見込まれそうだ。

「簡単に言つと魔法生物に関する様々なことを行つ部だ」

「ざっくりし過ぎですよ」

ベルの説明に容赦ない突っ込みを入れるセイショウ。

初対面から散々な扱いを受けたので、こちらも猫をかぶるような遠慮は必要ないと彼は判断した。特に短い付き合いならまだしも、これから部活動を通して長い付き合いになりそうなのだから。

「すまない、どうも説明というのは苦手で……」

ベルが申し訳なさそうな顔をした。

年下であるはずのセイショウから生意気な態度をとられても、気を悪くするどころか大真面目に反省している。

(1番付き合にくいタイプだ……)

ベルを見ながらセイショウは、苦虫を噛み潰したような顔になった。冗談が通じない相手というのは慎重に対応しないと、あらぬ誤解やら要らぬ騒動やらを呼び起こす。この女性を相手にする時は言葉に気を付けようと思った。

彼女とは対照的に、そんな気遣いが全く無用に思えるのがソルだ。何でも冗談にしまいそうな態度を見ると、そもそもこの男は人生を真面目に生きたことがあるのだろうかと思ってしまう。

「調査、研究、保護、飼育、繁殖、討伐……まあ魔法生物に関することなら何でも、うちの部の仕事だ」

指を折りながらソルが説明する。

「魔法生物……魔物、って略されるけどよ。その生態を研究することが主流だ。ただ作物が荒らされたり旅人が襲われたりと、魔物による被害が出ている場合は討伐を請け負う。逆に、絶滅しそうな種を保護して飼育したり、繁殖に手を貸してやったりすることもある」
「なるほど」

頷きながらセイショウが横目でチラリと、部屋の隅で眠るもふりーなを見る。彼の視線に気づいたソルが「ああ、あれは違うぞ」と顔の前で手を振った。

「もふもふたちは神獣だからな。魔物とは違う」

「神獣……？」

留学してくる前にオートの言語と文化、風習も予備知識として仕入れてきた。この国は様々な宗教が混在しているが、オート固有のものと言えば、多神教の『オルゴ教』のはずだ。

「オルゴ教では多種多様な神を祀る。神々の祠を見たことがあるか？」

セイショウが滞在している下宿のすぐ近くには、水の神を祀った祠があった。下宿で水汲みの手伝いを申し出た時、主人から「帰りに井戸の水を少し、祠にお供えしてくるように」と言われて立ち寄ったことがある。

どうやら近隣の住人が使う共同井戸の守り神として祀ってあるらしいが、こざつぱりとした小さな祠だった。

「祠の両側に、一対の神獣の像が設置されていたらう？ あれが、もふもふともふりーなだ」

神々と人間を仲介するもの。それが神獣であるそうだ。

「へえ……僕、本物の神獣って初めて見ました」

少し感動して、改めてもふりーなを眺めるセイショウ。神獣だと言われれば、その雄大さも美しさも、なるほどと納得できる。

彼の母国でも神獣という存在は居るが、実物を見たことはない。全て伝説上の生き物か、架空の生物という存在であり、神と人間を橋渡しするのは人間の神官だ。

「オートでは神獣がとても身近な存在なんですね」

「いや、そうでもないぞ？ 実際にもふもふを見たことのある人間なんて、ほんの一握りだ。滅多に姿を現さないからな」

「え、でも……」

ソルの説明を受けて不思議そうに視線を戻すと、ベルが明後日の方向を向いていた。

「ベルはオルゴ教の唯一の巫女だ。もふもふたちと意志の疎通ができるのはコイツだけなんだよ」

セイショウが目を瞋る。

「本来、巫女つてのはそう簡単に神獣を呼び出したりするもんじゃないんだが……この女、四六時中もふもふたちを自分の傍に置いて移動に使ったり昼寝する時の布団代わりにしてるんだ」

「……」

無言で彼女に視線を送るセイショウとソル。その圧力にいたたまれなくなっただベルが、口を尖らせて反論した。

「……奴等とは幼い頃からずっと一緒だったのだ」

「だからって部室で飼うな！」

「私は学生なのだから仕方ないだろう！」

これもきつと、日常茶飯事な言い争いなのだろう。ソルとベルのやり取りを、生暖かい目で見つめるセイショウ。

きよろきよろと周囲を見回し茶道具を見つけると、自分のための茶を入れて2人の喧嘩が終わるまで待つことにした。ついでに近くにあった茶菓子も失敬する。

コリコリと歯ごたえの良い、親指の爪ほどの大きさの焼き菓子を食べていると「くーん」と背後から声が聞こえた。

振り向くと、目を覚ましたもふりーなが床に腹這いになり、上目使いでセイショウを見つめている。どうやら菓子が欲しいらしい。

「ほら」

セイショウが菓子を放り投げると、もふりーなは嬉しそうに口を開けた。その口の大きさに比べると菓子はあまりにも小さく思えて、ちゃんと味がするのか心配になってしまう。

目を細めて喉を鳴らすも様子も可愛らしく、何度かセイショウは彼女に菓子を投げ与えてやった。

やがて茶がぬるくなつた頃、喋りつかれたベルとソルがテーブルにやってきた。

「ああ、終わりましたか」

「君は環境適応能力が高いな……」

「神経が図太いと言われないか、てめえ」

ソルの問いは無視して、セイショウは自分が座っていた椅子をベ

ルに薦める。

「質問いいですか、ソル」

「なんだ？」

「先ほどの活動内容で、どうしてこれだけ稼ぐことが出来るんですか？」

討伐の依頼をこなして報酬をもらうこともあるだろうが、それだけでは説明がつかない。

セイショウの疑問に「ああ」とソルは頷いた。

「魔物から素材をとって売るんだよ」

「素材？」

「抜けた毛とか、角とか爪とか骨とか。魔法薬だけじゃなく、衣服や武具の材料になるものが多い。おまけに高値がつく。そういうのを集めておいて売るんだ」

「魔物の肉体に無駄なものは無い、という言葉まであるぐらいだ」

ベルが穏やかに微笑みながら言った。

なるほどと頷くセイショウ。魔物が多いといわれるオートだからこその話だ。魔物を単なる厄介者とせず、資源の1つとして有効利用しようとする姿勢が感じられる。

先ほど触れたもふりーなの毛など、上質の絹に劣らない手触りだったし、神獣の毛という希少性も相俟って高額で売れるのではないかと……と少々怪しいことを考えながらセイショウが振り向いた時だった。

「ベルちゃん、居る？」

間延びした声とともに入口の戸が開けられ、ひょっこりと顔を出

した人物。

「捕獲!!」

「きゃー!?!」

その顔を見た瞬間、セイショウは現れた人物を小脇に抱えていた。

「さっそく魔物ゲット! ソル、素材の確保!」

「ええええええ」

「落ちてけセイショウ。どんだけ金にがつついてるんだお前は」

狼狽えるベルと呆れるソルの顔を眺めた後、セイショウはふっと息について身体の力を抜いた。

「冗談ですよ。僕だってキャットガーター族ぐらい知ってます」

抱えていた人物をそつと床に下ろし、ぼんぼんと衣服を整えてやる。

それはセイショウの腰ぐらいの背丈の少女で、ショートカットの髪に包まれた頬は丸っこく、どんぐり眼に呆然とした表情を浮かべていた。その頭には猫の耳が生えている。

なんだよ冗談かよ……と舌打ちをするソルと違い、ベルと猫耳少女はいまだシヨックで固まってしまっている。

セイショウは勝手に少女の手を取ると、「新入部員のセイショウです。よろしく」と挨拶した。

「あ……え〜と……メイです……?」

少女が自己紹介する。展開についていけず、混乱していることが分かる口調だった。

「冗談だったのか……。それにしても心臓に悪い冗談だぞ」

ようやく復活したベルが、咎めるようにセイショウを見つめた。その言葉で我に返った少女が、肩をすくめるセイショウの顔を下から眺めながら「メッ！　ですよ」と頬を膨らませる。

「……」

動作も容姿も幼いが、やはり先輩なんだろうな……。

ふくれっ面を見下ろしながら、すっと指を伸ばして顎の先をくすぐってやると、メーイは顔を綻ばせて喜んだ。

「メーイは飼育担当だ。飼育小屋の管理をしている」

ひとしきり謝罪の意を込めて撫でてやると、メーイはすっかりセイショウに懐いたようだ。嬉しそうに彼の手をとって頬をこすりつけている。

幼女趣味に見られないだろうかと密かにセイショウが心配していたら、ソルが彼女を顎で指しながら説明した。

メーイは「あ！」と何かに気づいたように声を上げる。

「そうだったあゝ。ちよつと素材を集めるのが大変だから、手伝ってもらおうと思って戻ってきたの。セイショウ君、お願いできる？」

「いいですよ」

セイショウが頷くと、メーイは「ありがとう」。じゃあ、あのお鍋を持ってきて」と部屋の一角を指さした。

そこは本格的な厨房になっており、彼女が指さした先には大きな

寸胴鍋が置いてある。

急に不安になったセイショウが「随分大きな鍋ですね。どんな素材を入れるんですか？」と尋ねると、メーイは自分の袋から油紙に包まれた塊を取り出した。

ガサガサと音を立てながら紙を広げ、中身をセイショウの目の前に突きつける。

「^{きも}肝」

早くも入部したことを後悔するセイショウだった。

夜、下宿にて

セイシヨウは重い足を引きずって自室にたどり着くと、うつ伏せにベッドの上に倒れ込んだ。

喉の奥から低い呻き声が漏れる。だが、たとえ独り言であろうと「疲れた」とは言わない。そんなことは声に出して確認しなくていい。

彼は疲れきっていた。どちらかと言うと精神的なダメージの方が肉体の疲労を上回っていたのだけだ。

枕の上に顔だけ起こしたセイシヨウは、メイと共に過ごした数時間を思い返して顔をしかめた。

彼女に連れて行かれたのはモットの飼育小屋だった。小型で大人しいので、愛玩用として飼われることも多いポピュラーな魔法生物だ。

しかし通常は両手に乗るぐらいの大きさであるのに、飼育小屋の中に居たのは、一抱えもありそんな大きさのモットだった。

「飼育用に小型化されたものじゃなくて、ここじゃ野生のままのモットを飼ってるんだよ」

そう言っおさなごてメイがモットを両腕で抱え込んだ姿は、巨大なヌイグルミを抱えた幼子にしか見えなくて、セイシヨウは笑いを噛み殺すために慌ててそっぽを向いた。

彼女の説明によると、野生のモットは繁殖力が強いのだが、あまり個体数が増えすぎると共食いを始めるのだという。

「だから時々、数を減らして調整してあげるの」。血が濃くなら

ないように、外から新しいオスやメスを入れてあげることとするし
」

のんびりとした口調で言いながら、無邪気な少女にしか見えない
メイが肉切り包丁を自在に操ってモットを捌く光景は………神
経が繊細な者にとってはトラウマものだろう。

セイショウとてそれほど繊細というわけではないが、これまで肉
屋が持つてくる塊り肉しか見たことのない者にとって、皮を剥いだ
瞬間の独特な臭いは、顔面蒼白になるぐらいの威力があった。

「だらしないうおーセイショウ君」とメイに言われながら、彼女
が取り出した内臓を冷水でよく洗い、塩をふって寸動鍋に入れてい
く。ほとんどヤケクソだった。

それが終わると、今度は池に連れて行かれた。

メイが捕まえたラニアという魚型魔法生物——小さいながら肉
食で鋭利な歯を持っている——の頭を切り落とし、鱗を剥がす。

死んだ魚なら捌いたことがあるが、生きた魚、しかも凶器を持つ
た魚は初めてだ。

最初はへっぴり腰でラニアを押さえつけていたセイショウだった
が、「ラニアの鱗は高値で売れるんだよ」と教えられてから、急
にきびきびと動くようになったとメイは語っている。

全ての作業を終えた時、空は茜色に染まっていた。

ずっと同じ姿勢で、しかも「1枚の鱗も取り逃さないように」と
神経を使って作業をしていたせいで、セイショウの身体はすっかり
強張ってしまった。ひきつるような痛みを我慢しながら、メイ
と共に素材を集め、部室に運び込む。ベルともふりーな、ソルの
姿は消えていた。

気づけば爪の間にはどす黒い肉片がびっしりと入り込んでいる。
何度手を洗っても取れないそれと格闘していたら、メイが小さな
両手でセイショウの手を握り、『除去』の魔法を使って汚れをすっ

かり取り除いてくれた。

顔の前に両手をかざし、裏、表とひっくり返しながら眺める。爪も皮膚も健康的なピンク色であることを確認した後、セイシヨウはため息をついて身体を起こした。

間が悪いと言うか、今夜の下宿の夕飯は臍物スープだった。

セイシヨウは一膳飯屋いちぜんめしやの空き部屋に間借りしており、食事は店で客に提供されるものと同じものを食べることができる。下宿の主人は大柄で不愛想な男なのだが、彼が作る料理はなかなか味が良く、いつも繁盛していた。

しかしどんなに味が良くても——しかも空腹であつたのだが——セイシヨウは、今夜のスープを食べられる気がしなかった。

そんな彼に対して主人は、ムツツリとした表情のまま、手早くタマゴ粥を作ってくれた。

セイシヨウからは何も説明していないのに、このチョイスの的確さは何なのだろうと思いつつも、ありがたく頂戴する。卵と塩と米だけのシンプルな粥は、ホツとする味がした。

腹もくちくなり、襲ってくる眠気を振り切りながら、セイシヨウはベッドから机へと移動する。やることを終えなければ寝ることは出来ない。

彼が取り出したのは、大学の授業の一覧表だった。骨ペンを手に、明日からの講義に顔を出そうかと考える。

セイシヨウは「この分野の勉強をしたい」という明確な目的があつてコセキ総合大学に来たわけではなかった。

自国での義務教育を終えた後、彼は就職した。名目上はある実業家の秘書ということになっていたが、実際は他の従業員たちと同じように様々な仕事をしなければならなかった。事業に関する専門知識を身に着け、必要な資格を取得する必要があり、仕事の合間に勉強する忙しい日々を送っていた。

ある日、かつて一緒に勉強した同級生たちと集まった時、友人たちが口ぐちに「学生時代には戻りたくない。もう勉強なんてしたくない。勉強は嫌いだった」と言うのを聞いて気がついた。

セイシヨウ自身は勉強が嫌いではなく、むしろ新しい知識を身に着けることが楽しいと感じていたことを。彼も「学生時代には戻りたくない」と思っていたが、それは勉強をしたくないからではなく、叔母の庇護の下でしか生きられなかった無力な自分に戻りたくないだけだったのだ。

そのことに気づいた時、彼は、もっと多様な知識を身に着けたいと思った。自分の興味あることは何でも学んでみたいという欲に駆られた。

コセキ総合大学はどんな分野の学問であろうと分け隔てなく学ぶことができ、まさにセイシヨウの理想にぴったりだったのだ。

一覽表を睨みつけながら、セイシヨウは生物学の講義と、経済学の講義に印をつけた。

クラブ活動は予定外だったけれど、こうなった以上は徹底的に利用してやるつもりだった。

どうせ経理の仕事をするならば、講義で経済学を学び、クラブ活動でそれを応用する。魔法生物の知識もつくだろうし、今日のような経験を積みば解剖学も得意になるだろう。

セイシヨウは他にもいくつか講義を選んで作業を終えた。顔を出してみても、もし面白くなさそうな内容なら受講を止めればいい。他に良い授業が見つければ、途中から参加すればいい。

コセキの講義は全て「来る者拒まず、去る者負わず」のスタンスであり、この自由さもセイシヨウが留学を決めた理由の1つだった。

そう言えば魔法生物研究会の正式な活動時間を聞いていなかった。明日の放課後、部室に顔を出してみよう。少なくともメイイは居るはずだ。本人がそう言っていたし、「セイシヨウ君も来てね」と熱心に言っていたから。

そこまで考えたセイショウは、叔母に手紙を書くという約束を思い出した。国を出る時に、入学初日の感想を必ず書いてよとせと念押しされていたのだ。うっかり書き忘れようものなら……あの叔母のことだ。何をやらかすか分らない。

やれやれと思いながら羊皮紙を取り出し、文面を考える。自分がモットの内臓を洗い、ラニアを捌いたことを知ったら叔母はどう思うだろうか。恐らく「これでセイショウも男らしい男になれる！」と喜ぶに違いない。

その様子を思い浮かべたセイショウは、げんなりと脱力し……結局、手紙には無難なことだけ書いて済ますことにした。

半月後・1

静まり返った室内に、骨ペンのカリカリという音が規則正しく響く。羊皮紙の上に覆いかぶさるようにして、セイショウはレポートを書いていた。

忘れられない思い出となった入学式からしばらくは、慣れない下宿先での暮らしと勉強に翻弄されて過ごしていたが、近頃では新生活のリズムを掴みつつある。心配していたクラブ活動の方も、今の所はメイと共に魔物たちの飼育をする程度だ。

「……いい加減、睨むのは止めてくれないかな」

眉間に皺を寄せて骨ペンを噛んでいたセイショウは、顔を上げるとうんざりした口調でボヤいた。

彼の視線の先では、1匹の神獣がセイショウの一挙一動を見逃すまいと黒い目を油断なく光らせていた。ちなみにその身体に抱きつくようにして、ベルがすやすやと眠っている。

最近になって分かってきたことだが、ベルは男子生徒の間では憧れの的らしい。

確かに彼女の顔立ちは端正で、黙っていれば涼やかな美貌の持ち主だ。背が高くてスラッとしているので、廊下を颯爽と歩く姿が様になる。ベルはあまり他人と関わらないので、そこがミステリアスな魅力につながっているようだ。

セイショウも何度が大学内でベルを見かけることがあったが、ソルと子供っぽい喧嘩をしている時とのギャップが大きすぎて、最初は戸惑った。部室の外に居る時のベルは神秘的すぎる。

友人となったクラスメイトたちが彼女に魅せられ、傾倒していく

様子を間近に見て、セイショウはベルと同じ部に入っている事実を隠しておくことに決めた。バレたら色々と厄介なことになりそうだ。

「この女性むすめが、ねえ……」

幸せそうな微笑みを浮かべて眠るベルの姿を見て、セイショウは疑わしそくに呟いた。

まるで小さな子供のような寝姿だ。少なくともこの光景から『ミステリアス』なんて言葉は浮かんでこないだろう。だが無防備な寝顔を見たというだけで、間違いなく男子学生の一部から袋叩きにされそうな予感はある。

ベルの、クセのない綺麗な髪がもふもふの上に広がっている。その色が見る角度によって薄いピンクから濃い赤にまで変わる様子を感心して眺めていたセイショウだったが、彼女を乗せた神獣が低い唸り声を上げたので、再びそちらに視線を戻した。

「分かってるよ。見なきゃいいんだろ、もふもふ」

空き時間を部室で過ごすことの多いセイショウだが、今日、来てみると室内にはもふもふとベルが居た。

2匹の神獣を見分けるコツはベルが教えてくれた。普段は埋まっ
ていて見えないのだが、額の毛をかき分けると、彼らには小さな角が生えている。1本だけ生えているのがもふもふで、2本生えているのがもふりーなだそうだ。

しかし教えてもらうまでもなく、セイショウには難なく見分けることが出来た。彼に懐いているのがもふりーなで、ずっと敵意ある目で睨みつけてくるのが、もふもふだ。

もふもふは、セイショウからベルともふりーなを守ろうと思っ
ているらしく、彼が部室に居る限りその挙動をずっと見張っている。

セイショウが少しでも長く彼女たちを眺めようものなら、警告の唸り声を発するのだ。セイショウが「何もしやしないよ」と訴えてみたところで、信用するつもりはないようだ。

部室のドアを開けた時、もふもふが居るのを見てセイショウは引き返そうかと思った。しかしどうしても仕上げなければいけないレポートがあつたし、他に適当な部屋もなかったので諦めたのだ。

鳥かごの中で、ピーチヨのポポが「ぼうぼう」と低い声で鳴いた。丸まった毛玉にしか見えないが、実は羽がほとんど退化した鳥形の魔物である。メーイのペットなのだが、極めて正確な体内時計を持っているため、部室の時計代わりになっている。

セイショウは「もうそんな時間か……」と呟くと腰を上げて、鳥かごに近づいた。ポポに餌をやりながら「そろそろ起きて下さい、ベル」と声を張り上げるが、呼ばれた本人はギュツと目をつむつて、いやいやと顔をもふもふにこすりつける。

腰に手をあてたセイショウが、呆れた様子で彼女を見下ろす。だがあまり長時間見ていると、またもふもふが唸り声を上げるし、起こすためにベルの身体に触れようものなら噛みつかれること間違いないのだ。

ため息をついた後、セイショウはわざとそっけない口調で呟いた。

「僕は別に構わないですよ、そのまま寝てても……………もうすぐカイが来ますけどね」

カツ！ とベルが目を見開いた。先ほどまで眠っていたとは思えないほど、その瞳はハッキリと意志を宿している。

「……………もう昼か？」

寝起きの掠れた声が、不安げに問いかける。セイショウが無言で

頷くと、ベルは即座に立ち上がって身支度を整えた。

「じゃあ、私はこれで」

そそくさと、まるで逃げるように部室を出て行くとするベルを、セイシヨウが呼び止める。

「できればもふもふも連れて行って下さい」

振り向いたベルは一瞬面食らったようだったが、すぐに頷くと「おいで、もふもふ」と手招きした。

巨大な神獣はのっそりと立ち上がると、ベルについて出口に向かう。出て行く寸前まで、目はセイシヨウを睨みつけたままだったけれど。

もふもふの突き刺さるような視線がなくなり、ふっと身体が軽くなったような気がした。

ベルたちが出て行ってから数分後。

「やあセイシヨウ君。やっぱり今日も居たね」

声を弾ませて入ってきたのは金髪碧眼の、上に超がつく美男子だった。全身が白ずくめの恰好で、布地には金糸銀糸の刺繍に青い縁取りと、とにかく派手な服を着ていた。しかしそれを上回る派手な顔立ちのせいで、違和感なくしっくりと馴染んでいる。

まるで舞台衣装のような恰好だが、恐ろしいことにこれが彼の普段着である。

「ちょっと待ってて。すぐ昼食にするからね」

鼻唄まじりに厨房へと向かう男の名前はカイ。魔法生物研究会の『調理担当』だ。彼の料理の腕は玄人はだして、時折プロの料理人相手に講義をするくらいである。

カイの料理への好奇心は留まることをしらず、クラブでは魔物の肉体を食材として活用する道を探究している。

メイとセイショウの初めての共同作業によって採取されたモツトの内臓は、次の日、カイの手によって見事な料理へと変貌した。ただ、セイショウがその素晴らしい味を経験するまでには、ちょっとした騒動があったのだけだ。

前日のサバイバルな経験がトラウマとなっていた彼は、カイが作った内臓ソテーに近づこうとしなかった。

メイは「好き嫌いはだめだよ」と言っただけで無邪気に肉の塊りを差し出してくるし、カイは「僕の料理の腕が未熟だってことかい」

と落ち込んだ。

デビルスマイル

悪魔的微笑を浮かべ、皿を手に猛然と追いかけてくるソルと、逃げ惑うセイショウという光景がしばし繰り広げられた後、無理やり押さえつけられたセイショウの口の中にソテーは突っ込まれた。

人間とは現金なものだ、とセイショウは思う。結局あの味を知ってから、自分の内臓料理に対する抵抗は全くと云っていいほどなくなってしまったのだから。

セイショウが昼時になると必ず部室に現れる理由は、無料で昼食^{タダ}にありつけるからだ。しかも料理人がカイであれば文句など出るはずもない。

カイも、自分の創作料理を食べてくれるセイショウを大歓迎しているというわけだ。

カイが料理をしている間にセイショウはレポートを仕上げ、丁寧に銀色の封筒に入れた。

それは大学の購買で売られているレポート提出専用の封筒で、宛名を書けば自動的に受取人の所まで飛んでいく魔法がかかっている。

セイショウが受取人欄に教授の名前を記入すると、封筒はひとりでに浮き上がり、ドアの隙間を通して廊下へと出て行った。

「さあ、食事にしようか」

封筒の行方を目で追っていたセイショウの前に、カイが料理を差し出した。緑色のトロリとしたスープから湯気が立ち上っている。

「何のスープですか？」

「とりあえず味をみてくれない？ 感想を聞かせてほしいんだ」

カイに促され、スプーンを手取るセイショウ。スープを口に含んでみると、鼻に抜ける爽やかな風味が広がった。微かなえぐみがアクセントとなり、後を引く。

「美味しいですね。さっぱりしていて暑い季節に良いんじゃないでしょうか」

二匙、三匙とスープを口に運びながらセイショウが感想を口にすると、カイは「そっか。気に入ってくれて良かった」と嬉しそうにニコニコと笑った。そして「はいこれ」とセイショウに紙を差し出す。

「……………何ですか、これ」

「領収書。この料理を作るために、少し珍しい食材を買ったんだよ。経費で落としておいてね」

「……………」

その金額に目を通したセイショウの顔が、盛大にひきつった。

半月後・2 カイとセイショウ

「なんでリブオイルがこんなに高いんですか！」

「あ、それねー純生オイルなんだよ。一般的に出回ってるのは、皮つきで種も取らずに絞ったものが多いんだけど、それだとそれなりの味にしかないんだよね。繊細な料理の場合なんかは特に、余計な風味が加わっちゃって……」

「包丁なんて今使ってるもので十分でしょう？」

「だってシエキ製だよ！？ あの刃物の名産地、シエキの包丁だよ！ 生産量が少なくて滅多に流通しないんだよ。そんな名品が手に入るチャンス逃してもいいって言っのかい！？」

「知りませんよ！」

驚愕の表情を浮かべて叫ぶカイに、半ばキレながらセイショウが怒鳴り返す。

セイショウだって人並みに料理はできる。しかしそれは食事を単なる『エネルギー補給』としか考えていない叔母と暮らす上で、必要に迫られて身に着けた技術である。さすがに彼女のように剣を包丁代わりに使うことは無いけれど、カイのように材料にこだわり道具1つに目の色を変えるような考え方は理解できない。

おまけにカイは自国での身分が高かったようで、他の者とは金銭感覚がかけ離れている。

なんの躊躇もなく料理に必要なものを購入してきては領収書を回してくるのだが、魔法生物に関する研究費用であれば全て経費で落とせることになっているので、セイショウはそれに応じるしかないのだ。

しかしこれまでは、まあまあ妥協できる範囲での出費であったので、セイショウも目を瞑っていた。だが今日のこれは……。

「……3か月は暮らせる額じゃないですか」
「そうなの？」

苦りきった口調で呟くセイショウに、きょとんとした顔で言うカイ。

「生活費の管理は全部、人任せだから分からなかったよ」とあつさり言われてしまったては、黙るしかない。

「もしかして部費が足りないとか？」と心配そうに聞くカイに、黙って首を横に振る。

そう、その心配はない。ラニアの鱗を売った代金のおかげで部費は潤っている。けれどソルも新しい魔法具を注文したと言っていたし、油断は出来ないだろう。通常の武具と違って魔法具は高価なのだ。

「部費は大丈夫です。でも……」

セイショウは俯いて難しい顔をする。

こんな調子では、自分の稼ぎが減ってしまうではないか！

魔法生物研究会では、1か月毎に収支をまとめる。利益から翌月の活動費を差し引いた後、余剰金は部員全員で分配できることになっているのだ。

利益が少なくなれば、当然ながら分配金も少なくなる。

講義に必要な教科書や道具類を中古で出来るだけ安く揃えたものの、今月は出費の多い月だった。少しでも多く稼いでおきたいという気持ちは強い。

セイショウの苦学生ぶりを知るカイは、気の毒そうな顔で遠慮がちに口を開いた。

「……今日も皿洗いする？」

カイはセイショウに色々とバイトを紹介してくれる。時にそれはカイが料理をした後の皿洗いだったり、カイのためのお使いだったりと個人的な要件のこともある。けれど、金銭的な援助を直接申し出るのではなく、バイトという形をとってくれる気づきがあった。たかった。

だがセイショウは少しためらった後「いえ……今日は他のバイトがありますから」と首を振る。そして自分の鞆から、いくつもの紙の束を取り出してテーブルに乗せた。

大学に入つてすぐ、セイショウは教授の1人からレポートの出来を賞賛された。

彼自身はそれを、秘書として働いていたところに培われた能力のおかげだと思っている。

セイショウの文章は「簡潔にして明瞭」という評価を得ているが——それも何人もの教授から——それは彼が仕事で書類を作成していた時に、最も気をつけていたことだったからである。

やがて1人2人と、友人がレポートの添削を依頼してくるようになった。

最初は断っていたセイショウだったが、予想外に頼ってくる人数が多いことに気がつく、これをバイトとして成立させることにしたのである。

有料ならばと引き下がった友人はもちろん居たけれど、有料でもいいからと頼んでくる友人も居た。むしろビジネスとして成り立ったことで、面識のない相手からも依頼は来るようになった。

セイショウからすれば、バイト代を稼ぐことが出来る上に、他人のレポートを読むことで受講していない講義の内容を知ることが出来る、まさに一石二鳥なのだ。

「僕も手紙を書こうかな」

皿洗いを終えたカイが、戻って来てセイショウの近くに座った。レポートの世界に入り込んでいたセイショウが上の空で頷く。だが彼は、どさどさと大量の紙が落ちる音を耳にして顔を上げた。

「……それ全部、今日分ですか」

「そうだけど？」

につこりと笑うカイの目の前に積まれた手紙の山。その全てがラブレターだ。

色男で紳土的。ついでに金持ちであるカイに、夢中になる女学生は多い。

そしてカイは、根っからのプレイボーイだった。

もらったラブレター全てに返事を書くマメさと、差出人全員の名前を憶えているカイの記憶力に、セイショウはいつも感心している。

「あ、でも今日はセイショウ君宛のも預かって来てるよ」

カイが数通のラブレターを差し出すと、セイショウは無表情でそれを見つめた。見つめるだけで手を出そうとはしない。

実はセイショウも、なかなか女にモテる。

サラリとした茶髪で童顔。そして物腰の柔らかい彼は、年下から年上まで幅広い年齢の女性に好感を持たれている。

ただしセイショウ本人は誰かを特別扱いすることなく、全員に平等な態度で接している。ということとはつまり、誰が相手であっても彼にとってはどうでもいいことなのだ。

セイショウが図書室で自習しようとすると、女学生が後をつけてきて本棚の影からクスクスと、気に障る笑い声を立てながら様子を

伺ってくる。そんな彼女たちを目当てに、男友達までもがセイシヨウと行動を共にしようとする。

だから彼は、大学での空き時間を部室で過ごすようになったのである。

「なかなか可愛い娘たちだったよ」と笑いながら言うカイ。

「いくら出すって言ってました？」

「……相変わらずだねえ」

嘆息するカイを前に、セイシヨウは肩をすくめた。

あまりにもセイシヨウが異性に興味を示さないので、一時期「男色では……」と噂が立ったことがある。

そのとんでもない話を聞いて、1度と言わず何度となく男に迫られたことのあるセイシヨウは、忌まわしい記憶を呼び起こされて身震いした。

勘違いした男色家に迫られないように。また、積極的な女学生からのアプローチを牽制するために、セイシヨウはハッキリと宣言した。

自分はノーマルである。苦学生なので、1日分の弁当を払ってくれば、デートの相手からパーティーのエスコートまで努めさせていただきます、と。

セイシヨウの予想通り、大多数の女学生は幻滅して離れて行った。しかし、一部の女たちはそれでも諦めようとはしなかった。

せめて自分の想いを知ってもらいたい。もしかしたらこの手紙が彼の目にとまって、自分に関心を抱いてくれるかもしれない。

そんな淡い期待を込めて書かれた手紙は、セイシヨウの荷物に忍ばされたり、今日のように知人に託されたりして、彼の下に届く。

そして封を切られることもなく、カイに押しつけられるのである。

「いつものように処分しておいて下さい」

快く手紙の処分を引き受けてくれるカイが、実はこっそり中を読んで次に口説き落とす娘を選んでいることを、セイショウは知っている。だが別に何とも思わなかった。

「分かった、片づけておくよ。……週末はどんな令嬢とデートなのかな？」

返された手紙を鞆にしまいながら、カイが冷やかすような笑みを浮かべた。

「サラ先輩です」

「ああ、彼女か……」

あっさりと答えたセイショウの返事に、微妙に顔を歪めるカイ。サラは『日当』を用意してセイショウにデートの相手を依頼してくる『客』だ。しかも、かなり常連の。

報酬をもらう以上は、その日を完璧な1日に演出してみせる。前述の宣言を行ったとき、セイショウにはその覚悟があったし、事実その通りに振る舞った。

デートの相手として彼ほど申し分のない男は居ない、と言わせるほど完璧な相手役を務めたので、彼を雇った客はほぼ全員がリピーターとなった。

中でも裕福な商家の一人娘であるサラは、頻繁にセイショウをデートに連れ出す。

ただし、彼女の顔は結構な美人なのだが、女好きのカイでさえ敬遠するほど我が儘で感情的な性格をしているのだ。

「疲れるだろうね、彼女の相手は」

「金のためなら大抵の困難は乗り越えられる、ですよ」

同情の言葉をかけるカイに、何でもないことのようにセイショウは答える。

郷里で働いていた頃は、一癖も二癖もある人間を相手に商談や交渉を行っていたのだ。それに比べればずっと楽な仕事だと思った。感心した様子で見つめてくるカイの視線が、かえって気まずい。

「それよりも、さっさと仕事を片付けてしましましょう」

「あ、うん。そうだね」

居心地の悪さをごまかすように、けれどそんなことを微塵も感じさせない冷静さを保った声でセイショウが言うと、カイは素直に頷いてラブレターの返事を書く作業に戻った。

セイショウもまた、数分後にはレポートの添削に集中していた。

半月後・3

いつも通りセイショウが飼育小屋に向かうと、金網の前でしゃがみこんでいるメーイの姿があった。

気にかかることでもあるのか、しきりに小屋の中を覗き込んでは何かを確認している様子だ。

「どうしたんですか、メーイ」

「セイショウ君……」

ふりむいたメーイは弱りきった顔でセイショウを見上げた。よろよろと立ち上がると、両手でギュッとセイショウにしがみつく。その目からは今にも涙が零れ落ちそうだった。

「どうしたんですか」

そつと頭を撫でてやりながら、優しい声でもう1度聞く。

「テンテンが……」

「テンテン？」

言われてメーイの背後にある小屋に目を向ける。中に居るのは「テンテン」と呼ばれる小型の魔物だった。

細長い胴体に大きな尻尾。手足と耳はちよこんと小さく、黒くつぶらな瞳。だがその愛らしい容姿とは裏腹に、性格は割と凶暴である。

この小屋ではアイヒ固有の種である「アイヒテン」を飼っている。テンテンの中でも独自の習性を持つため飼育は難しいと言われているのだが、魔法生物研究会はその繁殖を、世界で初めて成功させて

いた。

夜行性なので小屋の中のテンテンたちはまだ眠っている。早めに目が覚めたらしい数匹が、緩慢な動作で餌を探していた。見たところ彼らの様子は普段と変わらない。

「テンテンがどうしたんですか、メイ」
「足りないの……」

ぐずぐずと鼻をすすりながらメイが言う。その言葉の意味をしばらく考えてから、セイショウは口を開いた。

「餌が？」
「……ちがうよ。この前、一緒に買いに行っただけでしょ」

少し呆れたような声を上げられ、セイショウはにっこり笑ってポンポンとメイの頭を軽く叩いた。

「冗談ですよ」
「……真顔でボケると紛らわしいよ」

口を尖らせるメイだったが、すぐに「でも」と言って微笑みを浮かべた。

「元気づけようとしてくれたんだよね。ありがとう」

そしてまた、ギュッとセイショウにしがみつく。
別に元気づけようとしたわけではないのだが……どうも彼女はセイショウのやること全てを好意的に受け止めるようだ。

果たしてこの誤解を解くべきか否かと迷っていたセイショウだったが、メイが消え入りそうな声で「……テンテンの数が足りない

のゝ」と囁いたために、急に真面目な顔つきになった。

「確かですか？」

小屋の中に目をやりながらセイショウが尋ねると、メイが無言で頷いた。

まだ入部して間もない自分では、ぱつと見て数が減っているかなどは分らない。だが飼育している魔物の全てを、1匹1匹を見分けられるメイが言うのであれば間違いない。

「また脱走ですかね」

セイショウは困ったような顔で眉間に皺を寄せながら呟いた。

以前、草食の魔物が飼育小屋から脱走したことがあった。彼らはセイショウとメイによって探し出され捕獲されるまでの間に、大学の植物園に壊滅的なダメージを与えたのである。ついでにカイの菜園にも。

その後、ベルとソルが植物の研究室と園芸クラブへ謝罪に赴き、貴重な植物が失われた代償として決して小さくない額の賠償金を支払うことになった。

ちなみにカイは、彼を励まそうとしたベルを逆に口説き、強引にデートの約束を取り付けようとしたところをソルに殴り倒された。

もしアイヒテンが脱走して、どこかに被害を与えたら……と損害賠償のことを考えたセイショウは自然、厳しい顔つきになる。

けれどメイは彼の疑問に「違うと思う」と首を振った。

「テンテンは……アイヒテンは繊細な魔物なの。本当は小屋に入れなくてもロープで囲っただけで、その中から出ようとはしないんだよ」

それは知らなかったとセイショウが目を丸くする。もしそうなら、確かにアイヒテンが自分から脱走するとは考えられない。

「盗難……ですかね」

渋面で最悪の可能性を呟くセイショウに、メーイは「多分……」と暗い表情で頷いた。

アイヒテンの毛皮は滑らかで手触りが素晴らしく、昔から高級品として人気が高かった。そのため人間による乱獲が続き、現在は希少種に認定されるほど数が減ってしまっていた。絶滅危惧種になるのも、そう遠い話ではないと言われている。

個体数の減少に歯止めをかけるため、数年前、魔法生物研究会はアイヒテンの繁殖に着手して見事に成功させたのである。その話は大きく取り上げられ、コセキ総合大学は国と都市の両方から功績を表彰されていた。

しかし繁殖に成功したからと言って、油断は出来ない。アイヒテンの繁殖期間は短い上に、1度に生まれる子供の数も少ない。そして依然として減らないのが——密猟であった。

「ベルたちに相談しないと……僕たちでは何もできませんね」

セイショウの声に、メーイが身体をビクリと震わせる。彼女が項垂れると、頭の上の猫耳もしょんぼりと下を向いた。

「……怒られないかな……」

俯いたまま小さな声で言う。

メーイは、飼育担当者だ。魔物の管理について責任を負う立場にある。彼女の怠慢のせいでアイヒテンが盗まれたと言われたら、甘んじてそれを受け止めなければならぬ。

だがセイショウは「大丈夫でしょう」と言うと、唇を噛んでいる
メイの両頬をつまんで左右に引っ張った。

子供の頬のように弾力のあるそれは、まるで餅のように驚くほど
伸びた。

「いひゃいお……」

顔を上げたメイが避難めいた視線でセイショウを睨みつける。
にやりと笑ったセイショウが、パツと両手を離れた。そしてその
場にしゃがみこむと、両手で頬をさすっているメイと視線を合わ
せる。

戸惑いの色を浮かべる大きな瞳を覗き込みながら、セイショウは
口を開いた。

「メイが一生懸命、魔物たちの世話をしていたことはクラブの皆
が知っています。明らかな過失でもない限りは怒らないと思います
よ。鍵の管理はちゃんと決められた通りにしていましたか？」

こくと頷く頭を、いい子いい子と撫でる。

「じゃあ、行きましようか」

セイショウが立ち上がって手を差し伸べると、メイは小さな手
をそれに乗せた。

彼女の手を引いて歩きながら、セイショウはすっかり保父さん
になったような気がしていた。

後日、その光景を見た学友たちの口から「幼女趣味」の噂が広ま
りセイショウの頭痛の種となるのだが、それはまた別の話である。

魔法生物研究会の部室には、もふもふともふりーなの像が置かれている。

セイシヨウはもふりーなの像にかがみこむと、そつと囁いた。

「ベルを連れて来てくれないか、もふりーな」

「いいなあセイシヨウ君は。僕がそうやって、ベル姫は来てくれないんだよ」

部室に残っていたカイが羨ましそうに声を上げた。

オルゴ教に関連する施設には必ず神獣の像が設置されている。大学は宗教施設ではないが、巫女であるベルが神獣の像を持ち込んだのだ。というのも、国内にある全ての神獣の像はもふもふともふりーなの意識につながっており、大学を留守にしがちなベルを呼び出すには最も手っ取り早い方法だったからだ。

神獣たちはベルがカイを苦手としていることを知っているため、緊急の用事でない限りカイからの呼びかけには応えない。しかしもふりーなはセイシヨウからの要望であれば、どんな時でも頼みを聞いてくれた。

オルゴ教の信者でもないのに、なぜこんなあからさまな贖罪を受けるのか。セイシヨウ自身も疑問に思っではいるが、今回のような緊急事態の場合はそれを有りがたく思った。

ベルを待つ間に、3人で盗難事件について話し合う。カイは目を丸くして驚きの声を上げた。

「それじゃ犯人は大学の人間だってことかい？」

「そうでしょうね」

セイショウが頷く。外部の人間が、大学の敷地内に奥まで入り込んでアイヒテンを盗むのは難しい。この建物全体のセキュリティはそれほど甘くないのだ。

「……そんな命知らず、居るのかなあ」

困惑した様子でカイが呟く。メイも困ったように首を傾げていた。

その疑問はもっともだ。魔法生物研究会の部長がベルで、副部長が「ソル」だということは大学内で広く知られている。アイヒテンを盗むということは、ソルに喧嘩を売るようなものだ。

「ソルのことを知らない新入生か、あるいはよっぽど無謀な人間かな？」

カイが呟いた時、廊下から「きゅるるるっ」と声が聞こえてきた。もふりーなの合図だ。

セイショウたちが振り向いた時、天井近くに作られた出入り口から神獣たちが滑るように入ってきた。背中にベルとソルを乗せている。

2人の姿を見た3人が、凍りついた。

ソルは下着姿で、ベルは――裸体にタオルしか巻きつけていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2900w/>

魔法生物研究会！

2011年11月17日17時39分発行